

小説 高岡智空

挿絵 竜胆

女神飼育

淫欲牝神の聖典

立ち読み版



プロローグ	ギリシアノ創世神話	006
第一章	フラウソラの慈悲	012
第二章	女神の憂い	033
第三章	女神の失意	096
第四章	女神の苦悶	146
第五章	牝神の陥落	199
エピローグ	ギリシアノ神話淫説	254

登場人物紹介

Characters



フラウソラ

民の暮らす地、ギリアノを創造した女神。かつては邪神を封じ、人間の安寧を保ち続けてきた。美貌もスタイルも完璧な偶像。

ヴェルニア

フラウソラの力を抛り所とした分体。通常は妹としてフラウソラに尽くす。ギリアノに下り、布教を行うこともある。

バストル

天災が起こっても何も救わない神に対して、憎悪を募らせる男。

「つ……わたくしの考えとは異なるようですね。人間は……いいえ、人間だけでなく他の動物も植物も、この世に生を受けたものは皆平等。わたくしがギリアノに求めるルールは、ただそれだけなのです」

過去に対峙した邪神には、そのような男尊女卑の概念はなかった。つまりこれは、バストルが女神への憎悪から組みこんだ思想であり、彼に根付いた感情なのだ。女神は自分に、女は男に屈するべきだと。

「——そこでようやく、贄取りの出番となる。このチーズと白濁酒が男への贄、神の血肉……そして、女にとつての贄は神の血肉ではなく——」

「え——いったい、なんのつもりです……」

そこでバストルのとつた行動を目にし、フラウソラは驚愕に思わず息を呑んだ。そんな女神の姿に男は愉悦を覚えたのか、ますます表情を歪め、喉奥から笑い声を響かせる。

「くくく……この、牡汚れをありがたく頂戴するってわけだ……」

衣服をはだけさせ、局部を晒した男がその根元を握り、存在感を示すようにゆらゆらと揺すりながら、こちらにゆつくりと近づいてきた。そんな教祖の動きに応え、五十人以上は集まっていた教徒たちも一斉にロープをはだけ、そそり立った股間を曝けだす。

「そんなものを見せて、なにを……このように晒すものではないでしょうに……」

冷静を装ってはいるが、初めて見る男性器の迫力に、女神の眉がひそめられる。

子作りをしない神として、人々を見守っていたこともあり、男性器にどんな用途があるの

かは重々承知している。女性と愛し合い、交わり、子孫を残し、種を繁栄させる——そんな尊く神聖な行為に用いるのだ。そして同時に、それは軽々しく他者に晒すようなものではなく、本当に愛する異性にのみ、行為に及ぶ際に見せるもののはずである。

（それを、このような状況で……まさか、わたくしとそういうことを……人が、神であるわたくしと……？ そんなことが、起り得るのですか……）

考えもしなかった事態に思わず呆けてしまい、思考が止まる。だが視線はしつかりと、目の前にそそり立つ男たちの欲棒を見つめていた。黒光りする肉幹と、木の瘤こぶのように膨らんだ亀頭、その表面には幾本もの血管が太く浮きでて、激しく蠢動している。

（……これを受け入れることで、女性は子をな生し、育んでいく……）

神であった頃には、想像だにしなかった行為を、頭の中に思い描く。人になったこの身であれば、自分も人の女性と同じく子をな生すのだろうか。

（これは、勃起状態にあるようですね、つまり……彼らはわたくしを性の対象と見ており、生殖行為を望んでいる……本当に、そんなことを……？）

短くとも、広げた手の端から端まではあるほどの長さ、太さはどれも親指と人差し指で作ったリングでは指が繋がらないくらいで、生に執着する牡の逞しさに満ちている。

とはいえ、その見た目に惹かれるようなことはない。あまりにも濃厚な異臭を漂わせるそれを感じるのには、どちらかといえば嫌悪の感情のほうが近かった。

「つ……せめて、水を浴びるなりして、もう少し清潔にするべきではないのですか……」

それならばわたくしも、その想いを無下に拒絶したりは——」

思わずそんなことを口走るフラウソラだったが、男はそれを聞くや、にやにやとした薄ら笑いを消し去り、怒りを滲ませた険しい形相に変化する。

「ああ？　なに勘違いしてやがる、クソ女神が……身の程をわきまえろよ。誰がお前なんぞと情愛を重ねるか、お前の役割は贖取り——要は体ていのいい性処理なんだよ！」

「えっ……やああっ!?　なっ、なに、をっ……くううっ！」

鎖を引かれて前に倒れ込み、すぐさま顔を上げる。そこに押しつけられたものの熱さに、思わず悲鳴を上げて顔をしかめ——それからようやく、その正体に気づいた。

「ひっっ——」

それは子作りに用いる、神聖な器官だというのに。

(あぐっ、あ、あつ……うううっ、それに、なんて……にお、いっ……くふうっ……)

鼻先に先端を突きつけ、異臭を放ちながら熱い脈動をドクドクと訴えるその肉塊は、生理的な嫌悪を込み上げさせる、醜悪な凶器にしか見えなかった。

「お前は人間を愛してるだの、見守ってるだのと言いながら、結局のところ本質を理解してねえ……ひと皮剥いた牡と牝が、ただガキ作るためだけにやると思ってるのか？」

「な、にを……い、言っているのですっ、当然ではありませんか！」

「馬ア鹿がつっ！　男のチンポは女に突っ込むために、女のマンコは突っ込まれるために ついてんだよ！　いや、女に限ってはマンコだけじゃねえ……全身余すところなく、男に奉

仕し、男によがらされるための存在ってわけだ。むしろ、快樂のためだけに身体を重ねる連中だらけだってことを、お前にも知ってもらわねえとなあ？」

男が軽く腰を揺ると、粘っこい汚れの感触が肉塊に押し広げられ、ニチャリと頬に嫌な感触を生む。ザワツと背筋が粟立ち、牡肉の迫力に気圧され動けなくなる。それでも気丈に胸を張り、フラウソラは声音を凜と響かせた。

「そ、そんな……あうっ、くっ……そのようなわけが、ありませんっ！」

「はっ、だったらご自分で証明してみせりゃいいだろうが、お偉ぶった女神様よお？　せつかく人間になれたんだ、その身体で人間の気高さを証明してみせろ」

睨み下ろしてそう口にしていた男の手が、不意にあごに伸びた。頬を押し込むようにあごを掴み上げ、顔を引き寄せられ、みつともなく歪んだ顔を間近に見られながら、男の声が耳に流し込まれる。

「いいか？　俺たちはいまから、お前を性処理の道具として利用してやる。それでお前が快樂を感じねえようなら、お前の考えが正しいってことだ……」

だが——と男の声が一段低く、冷たくなった。

「それができなきゃ、性器で快感を得ようとすると人間の性質を、お前はなに一つ理解できてなかったってことになる……要するに、女神として正しく人を見ていなかったってことだ。そんなお前が人を見守るのに相応しいかどうか、考えるまでもねえ……どうだ、女神様よお？　そのお強い心つてのを、試させてもらおうじゃねえか」

ドクンツと心臓が大きく高鳴り、瞬く間に脈動が速まり、嫌な汗が背中に滲む。男の脅迫じみた言葉に異様な迫力を感じ、知らず息が荒くなっていた。けれどそれらを無理やり押さえ込み、呼吸を整え、キツと視線を上げてバストルを睨み返す。

「っ……いいでしょう、元よりいまこの身は、あなた方に委ねています。わたくしの身を弄ぶというのなら、好きになさい、そして——己が過ちを悔いるがいいでしょう」

生殖行為自体は神聖で、そして誇り高いものだと思っているが、それは互いの尊厳を尊重してこそだ。いまこうして汚れた性器と、快楽を貪るためだけという行為に嫌悪を抱いている自分が、そんな行為で悦びを覚えるはずもない。

それに、ヴェルニアが自由に動くための時間も必要だ。交渉の時間が得られないならば、自分がこうすることで猶予を作れるかもしれない。彼らが長く自分に注目すればするほど、人々は平穩に過ごせ、ヴェルニアの動きから目を逸らすこともできる。

（そもそも人間は、そのような墮落した存在ではありません……種を残すための神聖な行為で、快楽を貪るなど……あり得ぬことなのですから）

彼らがいくら策を弄したところで、この心まで墮落せしめることなどできはしない。人という存在の美しさ、そして尊さを彼らに知らしめる、いい機会でもあるはずだ。

そこまでを考えた上で、フラウソラはそう返事をしたのだ。だが——。

「くっくく、いい覚悟じゃねえか……なら、とりあえず贄取りから頼もうか？」

低く響く教祖の声を聞かされると、やはりビクンツと肩が跳ね震える。

(こ、このような……あ、ぐっ、な……なんと、おぞましい形をっ……)

子を生ずための、大事な器官である——それはわかつているが、見た目のグロテスクさに気持ちが悪く引け、込み上げる嫌悪を抑えることはできなかった。

男が少し身を引いたことで、目の前に大きく見せつけられた男性器は、その赤黒い外見や黒光り、そしてこびりついた白い汚れという、穢れに満ちた全貌を露わにしている。それと同時に、非常に強い存在感と逞しさを見せつけ、股間からそり立ってへそにまで届く長大なサイズは、僅かにでも目を背けると不安を覚えてしまう。目を逸らした瞬間、それが襲いかかってくるのではと、そんな思いに駆られた。

「こ——これを、どうしろというのですっ……」

思わず顔を背けて視線を逸らしてしまい、直視することはできずにチラチラと視線の端で捉えるような格好になってしまう。そんな女神の初心な姿を眺め、男が唇を歪める。

「言ってるだろうが、女はこれに口で奉仕し……むしろぶりついてチーズ代わりの恥垢をこそぎ、ねぶつて扱じいて射精を導いて——精液を白濁酒代わりに啜じるってわけだ」

「なっ……なにを馬鹿なっ……ひっ、やっ、なにをっ……あぐううっ……」

握られた手を必死に振り払おうとしたが、神としての力を首輪に封じられたフラウソラは、いまや年若くか弱い女に過ぎなかった。今日までの長い苦勞を刻んだ、筋骨隆々の逞しい男の腕に掴まれ、それから逃れる術などあるわけもない。

(い、ひいっ……あああ、本当に、こんなものを……さ、触らせるなんてっ……)

スラリと伸びた指で肉幹を握るようにさせられ、手の平からは熱い脈動が余すところなく伝えられる。こびりついた老廃物や汚れが手の中で潰れ、不快感に背筋が総毛立つ。

(これが男性の……燃えているように熱く、それに……こ、これほど硬いなんて……)

指に力を入れて開こうとしても、上からバストルによって押さえられて、手を離すこともできない。五本の指で汚れを拭うように、けれど実際には肌に擦りつけるようにして、グチャグチャ、ズリユズリユと亀頭を撫で回す動きで、教祖の肉棒を扱かされていた。

「あうっ、んうっ……くっ、やっ……い、いい加減に、放しなさいっ……」

「ああ？ 誰に偉そうな口叩いてやがる……お前は教団に供された、いわば所有物なんだぜ？ 逆らうことは、約束は反故にしたいのか……それともなんだ？ チンポ扱いてるだけで、気持ちよくなってきたっかあ、淫乱女神様よお？」

文句を言っても手を離してはもらえず、耳元に唇を押しつけて、挿入やっするような言葉をささやかれる。カアツと頬を屈辱に赤く染め、瞳をつり上げてフラウソラは男を睨み返すと、こうなれば意地だというように、指先を粘膜塊に押しつけた。

「だ、誰がつっ……そのような気分になど、なるうはずがありません！」

「なら続ける。これは俺たちにとつて大切な儀式なんだぜ？」

「ふぐっ……わ、わかつて、いますっ……くううっ……」

そう、これはただの儀式——そう割り切ろうと思うのに、妙なことを問われたせいで、真つ赤だった顔がさらに赤く、耳の先端まで茹で上がったように染まってゆく。顔だけで

はなく、身体中が熱く、手の平や足の裏、ピッタリと張りつく白いワンピースドレスの内側にも、ジワリと汗が染みでてくるのが感じられた。

(っ……こんな……はあ、あっ……んっ、こんなことで、だ……誰が……んっ)

男の恥垢と汗が手の平で混ざり、ニチャニチャと糸を引くような粘度を見せ、粘膜と擦れて伸び広がる。ヌルついたその感触を潤滑油にして、手を上下に動かしていると、握り込んだ牡亀頭からも粘ついた透明の滴が溢れて、指先に絡みついてきた。まるで生き物が涙を流すような反応に驚き、ビクッと肩を竦めたフラウソラは思わず手を引きかける。

「ひっ、あっ……うくっ、やっ、な……なにか、出てっ……きやうっつ！」

「それいつもしつかり手で掬って、チンポに絡めて抜け。それとその顔だ……嫌そうなツラはやめて笑顔で奉仕しろ、それが教団における女の役割だ」

片手だけで扱っていたはずが、空いているほうの手まで取られ、片方で亀頭を丹念に撫で回しながら、片方ではシャフトを丁寧に扱かされる。溢れでる大量の滴が流れ落ちて両手に絡まり、グチュグチュ、チュプウ……と卑猥な水音を奏で始めていた。

(うっ、い、いやああ……こ、このようなものを、まだ……まだ触らないといけないのですかっ!! あぐっ、あああ……わたくしの手が、ドロドロにい……)

指摘を受けても、望まぬ行為に与えられる不快感のせいで、表情を穏やかになどできない。だがそんな女神の態度に瞳を細め、男が顔を寄せてささやいてきた。

「おい……それ以上、その不愉快な顔を見せるつもりなら、お前の信者どもに贖取りを任

せることにするぞ。それが嫌なら、きちんと役目を果たせ」

「つつ!? そ、そんな——う、くつ……わ、わかりましたつ……わかりましたからつ、皆には手をださないでつ……」

そう口にすると同時に、重ねられた男の手が遠ざかってゆく。もはや強制はしない、けれどそれは解放するというのではなく、自分の意志で奉仕しろということだ。

(構いませんつ……ただ、手で擦るだけなのですから……つ)

改めて握りなおした熱棒が、グチュリと音を立てて指に熱さを伝える。先ほどまでしていたように、亀頭を握り込んで肉竿を持ち、嫌悪をこらえてゆつくりと扱く。

先端から溢れた粘液が手の平に押し潰され、ニチュリニチュリと嫌な音を奏でる。その中には、亀頭の周りに絡みついていた白濁の汚れも混ざっているはずだ。汚物そのものを捏ね回しているような不快感を覚えながら、もう片方の手には生の脈動と昂りを痛いくらいに感じる。垂れこぼれる粘液を擦りつけながら扱っていると、時折それが跳ね上がり、それを目にするたびに女神の鼓動はドクドクと早鐘を打っていた。

「くくくつ、いい気分だぜ、女神様に手コキさせるなんてなあ……お前ほど上玉ならなおさらだ。そつちも満更じゃねえみたいだなあ? さつきから汗びつしよいかいて、呼吸はハアハア荒れつぱなし……明らかに発情してますって感じじゃねえか。しかもその目、俺のチンポを凝視してやがる……くくく、素質は十分だな」

「くつ、そのようなことはありませんつ……これはただ、暑いだけで……」

冷静を装つて無表情でそう返すが、男の言葉に羞恥を覚えさせられる。

「つ……落ち着くのです、慣れぬ行為で緊張しているだけ……こんな言葉で惑わそうとすることこそ、彼らが間違っているという証明にほかなりません……」

そう切り替えて、行為を淡々とこなそうとするのだが、男の言葉がそれを阻害する。

「このことを知りやあ、お前の信者どもも大喜びだろうよ……くくっ」
「どういう意味です、それはっ……」

聞かなければいいのに、妙な行為を強制されている心の余裕のなさからか、つい聞き返してしまふ。そんな反応を嬉しそうに眺め、男が続けた。

「フラウ信教の経典には、お前の絵姿が大量に載せられている……その絵を見て信者の男どもはチンポおっ立てて、いまお前がやってみてえにシコシコ慰めてたつてわけだ。そんな連中に、女神様はチンポ扱きが得意だつて教えてやりやあ、当然喜ぶだろうがよ」

「なっ——い、いい加減に黙つていなさい！ そのような妄言を、よくもっ……」

事実か否かはわからない、けれどそんなことを聞かされたせいで、自分がどのような目で見られているかが、痛いほどに伝わってきてしまう。無意識に周囲の男たちの様子を窺つてしまうと、知りたくなかったことに気がつく。彼らの視線は自分の手や顔、そして脚から腰に伸びるラインを辿り、魅惑的なヒップとバストに突き刺さっていた。

（ふあっ……んっ、やつ……み、見るのではありませんっ、そのような目で……）

気づかないようにしていたが、バスタールの指摘を受けたことで彼らの感情が空気を震わ

せ、自分に迫っているのを感じてしまう。その感覚が羞恥を呼び、恥辱を目覚めさせ、女神の肉体の火照りをさらに強くさせてくる。

「んっ、やっ……あ、はっ、ああ……はあっ、はあ……んくっ、ふう……」

繰り返して肉棒を擦っていると、次第にその反応から、どのような動きがいいのかを無意識に察してしまう。亀頭を握りながら、親指でその裏側の筋になった部分を擦れば、バストルが低く呻いて腰を跳ねさせる。肉幹を撫でる手は指先で陰囊を擦りつつ、親指と人差し指でリングを作って強めに根元から扱けば、包み込んだ肉棒が熱く脈動して、悦びと昂りを訴えかけてくるのだ。

「いいぜえ、なかなか上手くなってきたじゃねえか。だが、手でしてただけじゃ、いつまでたつても礼拝は終わらねえ……贄取りがチーズと白濁酒を口にするまではな」

「——っつ！ くっ、や……やはり、しなければ……いけないのですか……」

手での行為には少し慣れたとはいえ、これを口にするというのは抵抗がある。しかし、そんなフラウソラの疑問のような呟きを聞き咎めたバストルが、無言で周りの男に視線を送ると、意図を察した男が神殿の端にある扉の奥——神官用のスペースとは逆の、宿泊用の個室が置かれた棟へ向かおうとした。

「くっくっくっ！ わ、わかりました！ しますっ、やりますからっつ……わたくし以外の人間に手をだすのは、やめてっ……やめて、くださいっ……」

「ふんっ……二度と逆らわないことだ、見逃すのはここまでだぜ。わかったなら跪け、そ

れと……そうだな、贄取りに相応しい言葉で挨拶してもらおうか。できるだけいやらしく頼むぜ、手コキ女神さんよお」

そんなことを言われても、贄取りを——いや、性行為を行う女性がどんな言葉を口にするのか、経験のないフラウソラにはまるでわからない。それを瞳で訴えかけ、指示を仰ぐうとするが、男は鼻を鳴らしてせせら笑い、教えようとはしなかった。

「こっちが教えても意味がないだろうが、ああ？ お前自身が、この行為をどう思っているか、俺たちを愉しませるように言葉を考えろ」

「つ……わ、かり……ました……ううっ、んうう……」

ペニスに手を添え、シコシコとマッサージのような愛撫を施しながら、男の足元に跪くフラウソラ。男たちの視線を肌を感じ、カアアツと頬が熱く火照った。

(恥ずかしい、彼らの喜ぶような言葉……いつたい、どのような……くっ、うう……)

溢れた牡滴と恥垢が絡む肉棒から、ムワアツと鼻の曲がるような異臭が立ち上り、鼻腔に突き刺さる。チーズとはよく言ったものだ、腐った肉のような生臭さと汗の臭気が混じる、クセのある強烈な臭いはそれに近い。一度嗅いでしまうと残り香が鼻腔に滞留し、もう少し、あと一度——と、その臭いが気になってたまらなくなる。まるで、脱ぎ捨てた衣服の臭いを気にする、一部の人間が見せる悪癖のような感覚だった。

「う、ぐっ……それでは、わたし……わたしですが、モルガノ教団の……贄取りの役目、賜らせていただきます……お、お口でっ……バストル様の、ペ、ニ……んっ、くう……ああ、せ、

性器より神の血肉を頂戴いたしますっ……」

臭いにむせ返りながら、なんとかそのセリフを発する。けれど――。

「……ふんっ、まあいい。拙い言葉はそのうち躡けてやる……今日のところは、別のことで許してやるとするか」

フラウソラにとつては、頭を捻って搾りだした淫語のつもりだったが、貶められる女神の姿を求める教祖にとつては、まったく足りないものだったらしい。その不服を解消するべく、ニヤリと唇を歪めた男に頭を掴まれたかと思うと、赤く染まった頬と潤んだ瞳が艶めかしい女神の美貌に、男が腰を寄せて汚肉塊を乗せるように擦りつけてきた。

「え——あ、あっ……ひいつ、あつ、やつ……いやあああつつっ！」

垂れたピーチブロンドの前髪に亀頭が擦れ、透明の滴が糸を引きながら広がり、肌にしつこい感触を塗り広げる。もちろんそれだけでなく、フラウソラの手によって肉棒全体に塗りつけられた恥垢が、女神の高い鼻先に、滑らかで染み一つない美しい頬に、そして柔らかく膨らむ瑞々しい唇に、ベタベタと容赦なく密着してくる。

粘土が絡みつくような不快な感触と、生臭さ、青臭さ、汗臭さの混じる濃厚な牡の臭気が顔中を覆い尽くす。その汚辱感に、フラウソラは確信する。

(や、やつぱりっ……いやつつ、こんなのいやああつつ！)

生殖に必要な、なくてはならない器官だということはわかる。それでも、こんな不潔な、汚塊にしか思えないものを顔に擦りつけられては、ひたすら嫌悪感だけが溢れだす。



低くなつた視線の真正面で、信者たちの股間が大きく膨らんでいる。けれどそれをこらえるように、彼らは時折悔しそうに目を伏せていた。自分を女神と認識し、その信仰心から邪な感情を抱きたくはないという反面、牡としてのサガに逆らえないのだろう。

(以前に、バストルが言っていた通り……ふうんっ、くふっ、はあっ……)

経典にある自分の絵姿を見て、彼らが自慰をしていると聞かされていた、この反応がその証明となつている。絵を見ただけでそうなるのなら、本人を目の前にして、さらにこのような破廉恥な姿を晒しては、理性だけではどうにもならないのかもしれない。

(——いいえ、彼らに咎など……これはわたくしと、教団のせいなのですから……っ)

辛そうな表情を見せる彼らを責めることなどできない。背後から突かれるたびに喘ぎをもらし、それでも拳を握つて表情を引き締めながら、フラウソラは震える唇を開く。

「ふうぐっ……んっ、か、構いません、よ……皆さん、どうぞ……」

自分がいま、どのような意味の言葉を口にしてしているか、それを思うと羞恥で消え入りたくなる。だがここで彼らを拒絶しても、またバストルに脅迫されて結局は相手にすることとなるだろう。そうなつたなら、信者たちは拒絶の意志を明らかにした自分に遠慮して教団に逆らい、ともすれば最悪の結果を迎えることになるかもしれない。

(そ、そうです、これは……これで、結果として彼らを救うことになるのですっ……)

「め、女神様っっ!!」「フラウソラ様っ、いまなんとっ……」

戸惑いを見せながら、けれど僅かな期待も隠すことなく、信者たちが声を上擦らせた。

その声と視線に頬を染め、それでもなるべく清楚に見えるようなおやかな笑顔を浮かべ、喘ぎをこらえつつ唇を引き締めて答える。

「わ、わらっつ……んっつ、わら、くし、は……皆の、こ……心を、救うために、ここっ……に、い、いるのです……苦しむこと、はあっ……んくっ、あ、ありません……わたくしに、お任せな……な、ひゃいっつ……ひあうっつ！」

腰の微かな動きで亀頭の当たる位置がずれ、膣最奥と密着するような位置にある、お腹側の肉壁が硬い亀頭に小突かれた。その瞬間、ジンと重く疼くような感覚が胎内に突き刺さり、頭がポーツと痺れ、その肉棒の感触がたまらなく愛おしく感じられる。だがそれを面に出すことなく、なんとか唇を引き締めて微笑むと、信者たちを呼んだ。

「お、おいでなさい、どうぞ……わ、わたくしの、く……くひっつ、くち、をつ……お使いなさい……す……救いを、与えましょうっ……」

そう、彼らは欲に溺れてそういった行為を求めているわけではない。異性のあられもない姿を見て股間を大きくするのは、おそらく、種を残すための人の本能が働いているのだろう。それでも自分に対してそのような行為には及べないと我慢する彼らが、これほど苦しそうにしているのだ——神として救いを与えることに、なんの躊躇いもない。

（バストルや、教団の者たちもそうでした……女性を見て、子を生させたいと思うのが男性の性質……ならば、仕方のない……こ、とっ……んおうっつ！）

擦りつけられた亀頭が、疼きを生むそのポイントをしつこく擦り、抉り、小刻みにゴツ

ゴツと叩き続けてくる。たまらず唇が開き、グパアアツツ……と涎の糸を引き伸ばして、牡を誘うかのように舌がくねってしまふ。それを目にしたからか、それとも女神が彼らの性欲を認めたからなのか——ついに一人の信者が、壇上へフラフラと歩み寄つた。

「め、女神様……自分は、自分はあ……も、申し訳、ありませんっ……」

「え、ええ……構いません、さ、ろうぞ……んあ、はああ……」

舌をくねらせると、生唾を飲んだ信者がついにペニスを突き立ててくる。数日は風呂に入っていないことが明らかで、白濁の恥垢がこびりついた肉棒には、汗の臭気と生臭さが纏わりついているようだった。舌に触れると痺れるほどの苦味が走り、鼻腔にはツンと突き刺さる臭気が満ち溢れる。これまで唾えた肉塊と変わらぬ醜悪で、たまらなく不潔だったが、相手は自分の信者だという思いも手伝い、嘔吐くことだけはしなかつた。これも彼らのためと言ひ聞かせ、舌をくねらせると、黒ずんだ肉塊を丁寧に清めしやぶつてゆく。

「はおおお……んもおおつ、おぶつ、んじゆるるっ……れりゅう……んっっ！」

「あひゅつ、はふううつ……あつ、ああつ、女神様っ！ イクううつ！」

挿入され、僅かに舌を動かしただけで、青臭く濃厚な粘液が舌の上に広がり、味覚と嗅覚がザーメンの存在感に埋め尽くされる。それでもフラウソラは吐きだしたりはせず、ニコリと唇を緩めて、コクコクと喉を鳴らし、汚液を余さず飲み下した。

「へへへ、なかなかのテクだろうが、この牡神様もよお？ なにしろすでに、フェラ経験だけなら千人近い……そこの男相手なら、一瞬でイカせるだろうさ」

「ひ、やああ……んつく、い、いわ、らい、れ……んううつ……」

しゃべると空気が流れ込み、青臭さが喉奥や肺の中にまで染み込んでくる。だが、その臭いを感じることで贄取りの間、バストルに散々味わわされた快樂の波が脳裏に甦り、彼の肉棒を啜えたままの秘部が、キュウウンツツと切なくわなわなしていないでしまう。

「せ、千人……本当かよ……」「こんなに一瞬で……」「そ、それほどいいのか……」
(ふあ……んつ、み、皆あ……どう、したと、いうの……あつひ、ひはああつ!)

緩やかな腰遣いから、急遽勢いよく腰が引かれ、亀頭に膣肉がかき混ぜられる。ピンと背中を張り詰め、鋭く走る快感の波に翻弄されながら、だらしない顔を晒してしまう女神の背後で、教祖が教祖らしく呼びかけた。

「さて、ここで提案だ、フラウ信教の信者諸君。この牝神のマンコはまだ開発中で、提供できません……贄取りの儀に供される口は、教団の者ならば誰でも味わえるよう手配するつもりでいる。どうかね、そんな牝への信仰など捨て、その証として女神の顔を、そして口を——汚し尽くすというなら、教団への入信を認めてもいいのだが？」

「——つつ!! なつ、なにを、い……ひえつつ! あひつ、ひぐううつつ!」

言葉を遮るように、今度は膣口から半ばまでを一気に抉り進められ、唾液を撒き散らしながら淫らな顔を跳ね上げてしまう。その艶めかしい表情に、そして教祖の言葉に抗えない魅力を感じた信者たちは目の色を変え、もはや欲求を止める手立てを失っていた。

「……お、おい、いまは本当だろうなつ……本当に、女神様を……この口を……」

「ああ、それは保証しよう。そうでなければ、諸君の信用を得られぬからな」

それを聞いた瞬間、ギラリと欲望に瞳を鈍く光らせ、吐精したばかりの男が叫んだ。

「わ、わかった！ それなら俺は女神様——いや、フラウを崇めたりはしない！ だから、いますぐっ……もう一度、口を使わせろ！」

「なっ……お、お待ちなさい、そのような——はぶうつ、んっ、や、やめへえ……っ」

男の萎えかけていたペニスが再び屹立し、唇に亀頭が押しつけられる。ネチャアツと粘液を絡ませてフラウソラが喘ぐと、その光景に周囲の男たちも我先にと声を上げた。

「フ、フラウソラ様っ……いい、いやっ、フラウ！ 使わせてもらおうぞ！」「我慢できんっ、くっっ……」「お、俺が先だ！ 女神様の……牝神の口を、味わわせろ！」

「んやああっ!? あぶっ、んっ、ふっ……お、おひふいへ、み、皆……んぐうっつ！」

贅取りのような、一人ずつを相手にする行為では済まなかった。唇を奪い合うように何本ものペニスが顔に乗り、頬をつつき、唇を捏ね、舌を擦り上げてくる。

（そ、んな……どうしてっ!? 先ほどまでは、あれほどにわたくしを——んううっ！）

いまの相手と同じく風呂も水浴びも許されなかった彼らのペニスは、どれもが白濁した恥垢に塗れ、すえた臭いが充満している。それを押しつける動きは女神への気遣いも労りもない、欲望に塗れた荒々しいものとなっていた。邪教徒たちとなら変わらなくなった彼らの汚塊で顔を擦られ、たちまち顔中が臭気に包まれてしまう。

「あぐぶううっつ、んぶっ、じゅっ……はっ、ひゃっ、めえ……んぐっ、ろ、ろお、かあ

……んじゅつ、くああんつつ！ ひよ、ひようきに……んぶあつ、やはああつつ……」

まさに——悪夢としか言いようのない光景だった。

少し前まではフラウソラを氣遣い、己の欲を抑えようとしていたはずの彼らが、完全に欲情し、自分を犯すことだけを考えているのがはつきりと伝わってくる。

モルガノ教団が蜂起して、すでにひと月近くが経過している。その間に生じた彼らの不安が、または意識せずにも女神が晒してしまった卑猥な姿、声、表情が——そして彼女を別の男たちが弄び、これからも弄び続けるという事実が。

（か、彼らをつ……んもおつ、おぐうう……獣欲の、虜に……か、えれ、ひまつた……とお……おむつ、んじゅるつ……んつ、んくううんつつ！）

汚辱に塗れ、耐えがたいほどの恥辱が込み上げるというのに、フラウソラは反射的に舌を伸ばしてペニスを舐め、唇に押しつけられると自ら開いて吸いつき、唾液塗れにして喉奥まで飲み込んでしまう。唇だけではなく髪や頬や額にと、フラウソラの顔中に四方八方から肉棒が押しつけられていた。そんな状態で背後からは、膣肉を貫かれる快感が何度も浴びせられ、一突きごとに女神は全身を震わせ、快感に身悶えてしまう。

「くくくつ、思い知ったかよ、クソ女神が。男なんてのは、だいたいこんなもんだ。この行動を理解しようとしなかったお前と、すべてを認めて解放させる俺たち……どつちが人に求められるか、もう考えるまでもないよなあ？」

「ひあつ、い、あ……ひや、れふうう……んぐううつつ！ ふみゅつ、ふあつ、あ、み



(ふはああ……あうんっ、は、はりやつ、うっ……ひょん、らっ……はおおっ!!)

ささやかれる単語にフルツと腰がわななくも、カリ高亀頭で膣肉をひと掻きされると、それだけで思考が溶け落ち、自らお尻を跳ね上げて肉棒を迎えてしまう。

(はぎゅっつ、らめっつ、ら……はず、なのにい……んうっ、あっ、んああっ!)

否定の言葉が浮かぶ、けれどそれがなぜなのかがわからなかった。なにか、とてつもなく恐ろしいことをされそうなはずなのに、開拓された粘膜壺を均され、開ききった最奥の子宮口を抉られると、そのさらに深部がキュウンツと疼き、牝蜜を歓喜の涙のように流してしまう。男の腰が叩きつけられるたび蜜液が押し込まれ、勢いよく噴き溢れる。

這い上がる絶頂の波に指がキュツと曲がり、全身がビクビクとはしたなく跳ねた。

(んはっ、あはああ……んあっ、あぎっ……んきっ、きも、ひっ……あいいっつ!)

「頃合いか……おらっ、教祖様のザーメンをくれてやる! 一発で孕めよおっ!」

いっそう強く引き締まる膣圧に、フラウソラの牝の昂りを感じた男が尻肉を強く打ち据えた。その痛みに尻を跳ねさせ、反射的に女神は叫び返してしまう。

「あひっ、はぎいいいっつ! はひっ、はひっ、ひまふっ、ひまふうっつ! んひっ、はっ……はあああんっつつ!」

返事はしたものの、もはやなにを言われているのか理解が追いつかない。それくらい快感に満たされ、頭が蕩けきっていた女神は男の腰遣いに合わせて自然と膣を締めつけ、限界まで引かれた男の肉棒が再度割り開いてくれるのを、心待ちにしてしまう。

(はひやつ、はひやくううつつ……んぐつつ、くあああああんつつ!!)

狭まったドロドロ腔肉を貫通され、背がわななき跳ねる。最奥の、重く身体の芯に響くような疼きを与えるポイントを硬く張りだした亀頭で捏ねられ、さらにそれが膨らんでゆくのを感じて、女神は瞳を閉じると、さらに腔圧を高めた。刹那——。

「イクぜえ……孕めつ、神の子を生め! 教団の家畜牝神に成り下がれ!」

——ドプウウウツ……ビュルルツツ、ビュクビュクツツ、ビククンツツ!

「——つつつ!! あつ、ひつつ……~~~~~つつつ!」

気が遠くなるような衝撃が、腔奥に迸る熱いドロドロの牡液から注ぎ込まれる。膨らんだ亀頭を大事な部分に擦りつけられ、貫通されるほど叩かれ、僅かに先端を埋め込んだままで、何度も何度もあの臭い汚液を注入されている。

(あつひ、はひつ、ひいいい……んくつ、あつ、れ、れへ、りゆつ……ふううんつ……)

だというのに、身体のうちこちに響く快感の波は、どこまでも大きく広がって全身がビクビクと躍動する。寒気のような痺れが背筋を這い上がり、身体の奥底がゾクゾクと震えっぱなしだった。言葉もだせないくらい感じ入り、これ以上はないという最低な屈辱の中で、最高の牝恥を堪能しながら——。

「あむつ、んじゅつつ……はぶあつ、ひくつ、あつ……イクつ、イクううつつ!!」

フラウソラは牡に屈服するように、絶頂宣言を放ってしまっていた。

（ふっ、ぐっ……う、ううう、すみません、すみません……皆の信仰を、裏切るようなことを……ですが、わたくしはなんと少しでも耐えてみせます……少年や男性たちを守るために、あなた方を犠牲にするなど……あつてはならないのですから……）

プチュウツ、と音を響かせて、ミルクに濡れた冷たい陶器の感触が尻肉に擦れる。それは円を描くように尻房を弄びながら、谷間を何度もなぞり、そのたびに腰をくねらせ喘ぐ女神の姿を、衆目に晒そうとする。

「んっ、あつ……ふあつ……ん、は、早くっ……しひいっ……っ、あはあ……」

ますます女たちの視線が冷たくなっていくことに、もはや羞恥ではなく恐怖さえ感じていた。しかしすべてに耐えれば、彼女らもきつとわかってくれる——そう信じて、この屈辱と恥辱に塗れた淫行をこなすしかない。

くねるたびに尻房が緩み、秘められた菊皺がついに空気に触れ、ヒクヒクツと淫らに蠢動していた。そこに狙いを定めたミルク注入用の陶器の器具が、丸みを帯びた冷たい先端部を押しつけ、粘膜襞を掻き分けながらゆっくりと埋没してゆく。

「んんんうううっつ！ あひつ、ひやつ、ぐっつ……んくううんっつ！」

強烈な圧迫感に、排泄口からなにかを逆流させられる違和感、そしてそれを男の手にされ、多くの人間に見られているという屈辱が、背中をザワつかせる。それと同時に、お腹の奥がジクジクと疼くような、身体が火照る感覚を味わわされていた。

「んっ、あつ、ま……まだ、い、入れるの、れ、す……かあつ、あふああつ！」

器具に際限なく汲み上げられているのではと思うほど、大量の冷えきったミルクが圧力とともに送り込まれる。想像の倍以上を腹に注がれ、膝と腰がガクガクと震えていた。すぐさま下腹部からキュルキュルと嫌な音が響き、全身の毛穴から脂汗が滲んでくる。

(はあっ、はっ、あ……ふうっ、はああ……だ、大丈夫、ですっ……)

ポッコリ膨らんだお腹から込み上げる水圧が、尻穴の堰を破らないよう、括約筋に力を込める。爪先までが痺れたように震え、呼吸はどんどんと荒くなつてゆく。そこで不意に、尻穴を塞いでくれていた器具が、肛門粘膜を裏返すような勢いで抜き取られた。

「あひいつ……ひっ、あっ……んくっ、くふうう……」

中身が漏れそうになるのを慌ててこらえるも、数滴の白濁が溢れ、太ももを伝う。その刹那、出ようとすることを押さえつける痛みが腹部を突き上げ、脂汗が顔中に滲む。

(ふぐうつつ?! んっく、あっ……は、ひっ……が、我慢っ、するのよっ……)

それでも表情を歪ませず笑顔を見せながら、女神は用意された壺に跨り、下半身を露出させた。剥きだしの尻に触れる冷たい壺の感触に、背中がゾワツと怖気立つ。

(うっ、やっ……み、見られてっ……ふっ、く……ごめん、なさいっ……)

女たちの真正面に座っているせいで、軽蔑の眼差しがはつきりと感じられる。中には、これが茶番だと思つて絶望した表情を浮かべ、自分が被害に遭わないように必死に祈っている者もいた。そんな彼女らの姿に心で泣き、何度も詫びながら、けれども表情だけは笑顔を見せたままでは、バストルが砂時計を立てた。

「よし始めろ、本気のオナニーでな。手を抜いてると判断すれば、ペナルティで一人輪姦し、そこからは俺らも手伝ってやる。それが嫌なら必死にオナれよ、牝神様あ？」

「ちよっつ……か、勝手に話を進めないで！ あたしたちは——」

教祖の言葉に女の一人が声を荒らげるが、それを一瞥して男が答える。

「言っておくが、お前らに発言する権利はない。そうだろうが、お前らは教団に所属しない限り、俺たちの敵対勢力だ。殺されていても文句は言えないとこだぜ？」

その脅し文句に女が顔を青ざめさせ、口を噤んだ。女たちを見回し、さらなる反論がないのを確認すると、男は女神の肩にポンと手を乗せ、そつと耳元にささやきかけた。

「俺らがしてやったような手の動きで、そのだらしねえ乳とマンコ、ドロドログチヨグチヨにすんだぜ？ あれだけヒィヒィよがつてたんだ、忘れてるわけねえよな？」

「んぐふううっつ……んっ、んうっ……んふっ、はっ、はあ……」

耳に流れ込む男の声、それを脳に響かせるだけで、トロトロと秘部が緩んでしまう。肩に触れる手の感触が、肉体に刻まれた快感を思い起こさせた。

（っ……いけません、これは演技なのですからっ……イ、イッたりなど、せぬよう……）

そう心に言い聞かせながら、両手を伸ばしてドレスの上から双丘を鷲掴みにし、荒々しい手つきで揉み捏ねてゆく。手の平に乳首を押しつけて圧迫しながら、何度も何度も、マッサージのように乳球を転がして形をひしゃげさせ、卑猥に歪ませて弄ぶ。

（あひいっ！ ひっ、あ、う……うそ、もうっ……もう、こんな……ああ、お……おっ

はい、敏感になってしまつて……んくひつ、あつ、ひあああつ！)

手の中から溢れだす豊乳を揉みほぐしている、まだ準備段階というような愛撫なのに、すでに乳芯がジワジワと蕩けだし、胸の奥に切ない疼きを広げていた。コリコリとした感触が手の中でそそり立ち、それを圧迫して手の平を滑らせると、甘い痺れが乳球に突き刺さる。勃起乳首の感度は乳球の比ではなく、ドレス越しに擦れるだけで、男の手から味わされた快楽を思いだしてしまうようだった。

「んあああつつ！ あうつ、はつ……あつ、んつ……やつつ……」

思わず声高に喘ぐとスカートを啜えていた唇からドレスが離れ、秘部を覆い隠すように垂れ下がる。だがその折、ニチャリと水っぽい感触がドレスに染み込んで、股間から溢れる水気を吸いながら、薄布は女神のデルタゾーンにベッタリと張りついていった。

「うそつ、あの女……」「濡らしてるわ、ただの変態じゃないよ、あんなつ……」
許せません！」「本気のとつて……自慰なんてものじゃないわよ、あんなつ……」

女たちの罵りの声が響く。羞恥のあまり手の動きが疎かになりかけるが、さらなる行為を促すように、バストルが背後で咳払いをする。

「ひぐつ……ん、んううつ！ あつ、はつ、はひゃああ……」

片手を乳房から離すと、名残惜しそうに豊乳肉がタブンツと揺れた。離れた手をスリットから滑り込ませ、触らずともわかるくらい濡れそぼつた股間に触れさせる。

(くひうつつ……な、こ……こんなに、濡れ……つつ、本当に、グチョグチョでは、ない

ですか……あふつ、ひつ、ひあんつ……こんなつ、ま、間違っているのにつ……)

少年を助ける前に、男たちに弄ばれながらも絶頂を迎えなかった、その悦楽の炎が胎内で再燃したように、身体が熱くてたまらなかつた。指先を淫裂に添わせると、膣口から溢れた粘液がドロリとこぼれ、用途の違う尻下の壺に吸い込まれる。

——ピチャ……グチュツ、ニチュンツ……!

「あひつ、ひくうつつ! あんつ、んつ……んつ、あつ、はああつ……」

潤んだ粘膜壁に触れると、刺激が膣奥に突き抜け、肉壁を越えて後ろの穴まで震えさせてくる。決壊しそうになる括約筋を必死に引き締めると、粘膜壁全体が敏感に研ぎ澄まされ、優しく擦っているだけなのに、耐えがたいほどの快感が刻み込まれてしまう。

「はふううつつ、んつ……んひうつつ?! あつぎ、ひつ……うぐつ、ううう……」

しかも問題はそれだけではない、溢れるのを押さえた反動で、水圧が一気に腸内へと戻っていつてしまう。グルルウウツと獣の唸りのような音が腸粘膜をざわつかせ、思わず叫んで床に倒れ、悶えてしまいたくなるほどの痛みが込み上げる。

(んあはつ、はつ……だ、めつ……が、我慢、して……ふつ、ふううつつ……)

排泄欲の波が去るのを待ち、粘液を絡ませた指を、お尻のほうからゆつくりと手前に、けれど小刻みに往復させ、媚粘膜を丁寧になぞってゆく。くすぐったさのほうが強い拙い愛撫だったが、異常な状況で敏感になった感覚は次第に心地よく感じだし、その細やかながら鋭い快感に心を掴まれ、フラウソラはいつしか夢中で指を動かしていた。

「んあつ、はつ、あううんつつ！ はあつ、あんつ、む、胸え……んつ、だ、だめえ……あつく、ち、乳首……か、かた、くうつつ……うんつつ！」

（違うつ、違うのですつ！ これは……皆を、救うためにつ……んつはああつ！）

声が本能を、心が理性を叫ぶ中で、股間の性神経が毒に犯されるようにジワジワと、甘い快楽に蕩かされる。少し擦ると膝が揺れ、下半身が脱力するほどの、温かな湯浴みのような心地よさだ。上下運動にも飽き、指先で円を描いて秘部を擦ると、意図した通り不意の刺激が走り、肩がピクピクツツと跳ね上がる。蕩ける、感じる、すごく気持ちいい——けれど、本当に触れたいのは割れ綻んで淫涎を流すクレヴァスではなく、その上側で触られるのを今か今かと待ち望んでいる、乳首以上に屹立した粘膜粒だった。

（ふあつ、あつ、こ、ここはあ……んつ、だめつ、絶対……触っちゃ、だめえつ！）

淫靡な空気に包まれ、発情しきった肉体はいつも以上に敏感なことが、蕩けかけた頭でも理解できた。こんな状態でここに触れては、とんでもないことになると思像できる。

（あくつ、んつ……んひつ、あ、で、でもつ……ですけどつ、こ、ここおつ！ ここ、触らないと……そ、そうです、本気で……しないと、いけない……からあつ……）

指先がプルプルと震え、その部分にいざ触れようとした——その刹那。

「おっと！ 砂時計が落ちきつちまったか……やれやれ、これで一人解放だな」

響く教祖の声に手を止め、慌てて砂時計を見る。ニヤニヤと笑いを浮かべ、バストルが差しだしてくる時計の砂はすべて、下の器に移っているのが確認できた。

「えっ……あつ、ひゅっ……んっ、そう、れすか……ふ、ふふ、よかつた……」

いましがた、考えていたことを思いだして、またも全身から汗が溢れる。だがこれは火照りによるものではなく、冷や汗だった。

（はっ、はぁ……わたくしは、いま……なにを、しようと……んくうつつ!!）

安堵と、緊張の解けた弛緩が汚物の圧迫を許し、尻穴堰が崩壊しそうになる。プピュッと音が漏れて数滴の汚液が滴ったが、周囲には気づかれずに済んだようだ。だが腸からの痛みのフィードバックはさらに濃くなり、四肢の先が震えるほどの寒気に襲われる。

（はぁっ、はぁぁ……こんな、ことで……まだ我慢できるのですか、わたくしは……）

限りなく本気には見せても、なるべく加減した動きをして、絶頂を回避するつもりでいたのだ。だがさっきの自分は、気がつけば夢中になつて指を操り、もしかすると――。

（そ……そんなことはありませんっ……はぐっ、うっ、うくうう……）

絶頂に向かおうとしていたのでは――その考えを振り払おうとする。けれどそれを耐えたとしても、こちらのほうはわからないというくらい、便意の圧力は強くなつていた。

「え……ど、どうということなの、これ……」「普通に、我慢した……」「ま、まだわかんないわよ！ あたしたちの反応見て、楽しんでるだけかも……」

そんな女神の不安とは正反対に、女性たちの考えは、安堵のほうへ傾いているようだった。もしかするとあの女は本当に女神様で、自分たちを助けに来てくれたのではないかと。そして変態の姿こそ偽りで、彼らを騙すために演技しているだけなのでは――と。

「ともかく、一人……よし、そのお前はこの札を持って出る。それがあれば、教団に属さずとも自由な暮らしを保証してやる。さて、続けるとするか」

発言の少なかつた、大人しく端に座っていた一人の女性がビクツと肩を竦めるも、それを持つて外に向かう。彼女がどうなるかはわからないが、おそらく男の言ったことは嘘ではないのだろうと、フラウソラは判断していた。

(つ……このまま、あと数十回耐え抜けば……おそらく、皆を……くつ、ふううつ……)

グギルルルウウウツツと凄まじい音が、下腹部の呻きのように響き渡る。聞くに堪えない下品な音に、フラウソラは消え入りたくなるほどの羞恥を覚えて頬を染めた。

だが——意外なことに、彼女たちの反応はそこまで悪いものではない。

「が、頑張つて、お願いっ!」「そうよ! 砂時計だつて、そこまで長くないし……」

自分を鼓舞し、元気づけようとする彼女たちの声に、思わずフラウソラは目を見開いてそちらを見つめる。彼女らも半信半疑という様子だが、一人助かったことで、この女が耐えれば助かるのは確かだと信じたらしく、半ばヤケ気味に声援を送っていた。

「わ、わかり……いひんんっつ、んっ……わ、わかり、ましたあ……あ、んっつ……」

ペナルティとしての行為だったが、上手くすれば彼女らを助けられるかもしれない。そう思うと、恥ずかしがってばかりもいられなかつた。

(そうです、ここで頑張らねば……彼女たちを助けることなど、できませんっ……)

それに——と、フラウソラは続けざまに考える。

(少年や他の信者たちは、わたくしがこうしていることで……すでに、助かっているのですから……ならば、次は女性たちを——)

そこに、女性らの貞操という賭け金がかかっていることを失念し、冷静さを失った頭と身体で、フラウソラはみっともない自慰を再開させる。

「あはっ、はうんっつ……んあっ、お、おっばいい……ひうっつ！」

秘部からは手を遠ざけ、少し中断していた乳首弄りを再開する。時間を置いたことで女陰がやや冷えており、もう一度身体を昂らせなければと、本能が判断していた。

「ああんっ！ んっ、あああ……こ、こんな、まだガッチガチでえ……ひぐうっ！」

両手の親指と人差し指で、ドレスの胸元に浮いた硬い屹立を強く摘み、乳球をユサユサと上下に揺すり立てながら引つ張る。ギチギチッ、ミチィッと音が響くほどの強さで胸を弄ぶと、頭が真っ白になるほどの鋭い快感が、波のように頭の奥になだれ込んだ。

(ひゃふっつ……んふうううっつ！ ああっ、あっ、いつ、いい……んうううっ!!)

ゾクゾクッと背中が震え、下半身が脱力しそうになる——けれど。

その瞬間、括約筋を押し広げて腸粘膜を竦ませ、多少は温もつたがまだまだ冷たい大量のミルクが、僅かに唇を緩ませた不浄の穴から、またもピュッと白濁飛沫を噴いた。幸いにして音も聞こえず、鼻を覆いたくなるような臭気も漂わない程度の量で、誰かに気づかれた様子はない。けれどその羞恥心をくすぐる感触に、蕩けかけた頭が一気に引き締まり、火照った身体が恐怖に冷える。

「んくあつっ、あつ、ふあつ、はつ……はあつ、あああ……」

危なかった——しかしそこで手を休めようとすると、そんな女神の心境を手に取るように把握しているのか、バストルが低い声でささやきかけてくる。

「どうした、手が止まっているぞ？ さて、どいつから抱かせてもらおうかねえ」

「——つつ!? ひっ……んっ、ふっ、ふあうんっ!」

誤魔化すようにとつきに手を動かした拍子に、引っ張り上げた乳首同士が擦れ合い、腰がカクンツと跳ね震える。乳房の表面が甘い波に痺れ、それが時間をかけて胸の奥を揺るがし、ゾクツゾクツと身体の端々が快感に躍ってしまう。

(はひいいいんっ!? あ……っが、い、いま、のおっ……んらっ、らめ、へっ……)

身体中が強張っているせいか、普段よりかなり敏感になっていた性感帯が擦れ、その快感の波が幾重にも折り重なって、身体中に広がってゆく。強烈な刺激ではないのに、排泄の波を堪えて心が油断していたこと、そして手を抜こうとして全身が弛緩していたことも手伝い、そこを襲った痛烈な刺激は、快楽の頂を間近にまで引き寄せてしまった。

(んはああつっ! はあつ、あつ、くりゆっ、き、きひやううっ……あひいっ!)

瞳がフルツと潤み、指先が痙攣して弾けそうになり、視界がチカチカと明滅する。

(……んひっ、ひくっ……あつ、ひぐっ……イツツ……クツ、イクううんっ!)

意識が飛び立ってゆく飛翔感、身体が宙に浮かび、さらにそのまま落下してしまうような浮遊感と喪失感に、身体中の力と意識が一瞬にして抜け落ちてゆく。

「あううつつ、んあつ、はつ、はああ~~~~つつ……あうつ、ううんつつ！」

——ポビュルツツ、プビユウ~~~~ツツ、プビユツ、ビュルルツ、ビュクツ！

緩やかに広がった快樂絶頂に頭が真つ白になり、椅子代わりの壺に腰かけたまま、フラウソラは蕩ける肉悦にただ身を任せてしまう。それとともに下腹部が緩み、腸壁を圧迫していた苦しみが抜け落ちた。冷たい感触が肉皴を引つ掻いて流れる、その刺激さえも快感を呼んでゾクゾクと背中が痺れ、女神は何度も身体を跳ねさせ、甘い余韻を堪能する。

(あぐつ、あつ、んはああつつ！ はふつ、あひゆつ、ひつ……ひもひつ、いいつ！)

そんな——どうしようもなくならしめない、舌を垂らして涎を流す牝の表情を浮かべながら、女神は耳をつんざくほどの大音量で下品な排泄音を響かせる。それまで見守っていた女たちは一瞬、なにが起きたのかわからなかつたように、呆気にとられて声もだせず、その光景をただ視界に収めていた。だが、やがて——。

「あ——は、え……は、はあつ？ なに、いまの……嘘でしょつ、あんたつ——」

一人の女が我に返り、震える声で叫ぼうとする。それを聞き、呆けていたフラウソラもようやく正気に戻って、そして現状に気づかされた。

「はあ、ああ……んつ、ん……んんううつつ!? え、あ……や、ち、ちが……違うのです、これは……これは、なにかの間違いつ……わたくしは、そ、そのような——」

「なにが間違いよつつつつ!! ふざつ……ふざけ、ないですよつ……えつ、ちよ、ちよつと……ウソでしょ、こんな……こんなことでつ、やめ……やつ、いやあああつつ！」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル！

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！
かなり過激なライトノベル！

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※「二次元ドリームノベルズ」は18歳未満の方は購入できません

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル！

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラブ！

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの公式サイトにて！

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!